

難病を持つ方のリハビリについて ～医療法人陽明会での取り組みを例に～

京都大学経営管理大学院 特命教授
高齢社会街づくり研究所 代表取締役
財団法人生涯デザイン研究所 専務理事
岩尾聡士

この度は愛知県難病団体連合会様の機関紙への寄稿の機会をいただき、感謝申し上げます。今後3回に渡って、私が目指している『誰もが住み慣れた街で最期まで暮らすことのできる DR.IWAO モデル』のための取り組みや構想をご紹介します。

第1回目は、私が創設しました医療法人陽明会が運営する名古屋市熱田区、昭和区、瀬戸市にある40人、60人、20人の高齢者向け施設でのリハビリの取り組みをご紹介します。難病や重度障害を持つ方のリハビリの大切さについてお話しさせていただきたいと思います。

難病や重度障害を持つ方にリハビリしていただくということについて、治療だけで精一杯でリハビリまで行うのは大変なのではと思われる方もいらっしゃるかと思います。しかしながら、私は、リハビリを通じて機能をできるだけ維持すること、できなかったことができるようになることで、その方の希望する生き方へ近づいていけると考えています。その思いから、私が創設した医療法人陽明会では、『たとえ病があったとしてもその人らしく生きる』を理念としています。

また、通常1施設2～3名の配置である理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を3施設で30名以上採用し、積極的にリハビリに取り組んでいただける体制をとっています。

では、難病を持たれている方が実際にどのようなリハビリをされているのか、ここからは、実際に医療法人陽明会でリハビリに取り組まれている方の事例をご紹介します。神経難病のリハビリと一口に言っても、筋力や日常生活動作の維持・向上のためのリハビリ、呼吸リハビリや摂食・嚥下リハビリ、福祉用具の選定など多岐にわたります。特に摂食嚥下リハビリは、日本一と言われる前藤田医科大学リハビリテーション学科教授の馬場先生、東海ブロック世話人をされている愛知学院大学口腔外科准教授の渡辺先生に毎月来ていただき、患者様の摂食嚥下の機能評価を内視鏡にて行って頂いています。

様々なリハビリがある中でも我々が大切にしているのは「その人らしく」という想いですので、入居者様らしさとは何か？ということを常に考えながら支援しております。例えば、車椅子で入居されたパーキンソン病をお持ちの50代の男性の方がいました。我々の法人でも多くはない若い方で、薬の効き具合で全く

動けなくなってしまう時もあり、なかなかお話しする事も難しい時がありました。まずはご本人の生活リズムを確立しようと、スタッフで連携しご本人の調子のよい時間帯を確認しながら、リハビリを行いました。最初に成果があったのは食事面でした。月に一度内視鏡検査を行う「嚥下回診」で先ほどの嚥下専門医と言語聴覚士、管理栄養士の連携で、ペースト状のお粥とムース状のおかず、トロミのついた水分から徐々に食事の形態をあげていき、今では普通のご飯と一口大に切ったおかず、トロミのない水分を召し上がれるようになりました。元々好きだったパンや麺類も徐々に提供を始めることができ、非常に喜ばれました。喜びを分かち合っていたある日、ご本人から「この病気になってから結婚記念日を祝えていなくて、お祝いをしたい」と教えてくださいました。ぜひお祝いしましょうと、元々パソコンの得意な方だったのでインターネットでケーキを購入し、この頃には理学療法士を中心に取り組んできた歩行器での歩きが安定してきていましたので、歩いて近所の花屋さんにお祝いの花束を買いに行きました。奥様にサプライズでお越しいただき、一緒に記念写真を撮った時のお二人の笑顔は今でも忘れられません。この方にとって好きなものを食べる事も、歩けるようになる事ももちろんですが、奥様と過ごす時間こそが「その人らしさ」だったように思います。

その他にも、同じパーキンソン病をお持ちで元々ファゴット演奏者をされていた方には、レクリエーションとして企画した演奏会でもう一度演奏できるようにと、呼吸リハビリを重点的に取り組み、ご本人もご家族も満足のいく演奏ができたことと喜ばれていました。進行性核上性麻痺の男性の方は、なかなか手が思うように動かず姿勢も崩れてしまい、ご自分で食事を召し上がれなくなっていました。そこで、作業療法士を中心に、食事姿勢や自助具、福祉用具等の食事環境を整えることで、もう一度ご自分で召し上がることができました。筋ジストロフィーの女性の方が大好きな旅行に行けるようにと、ご家族でもできる車椅子移乗の介助方法をご家族にお伝えし、安全に旅行できるようにプランを一緒に練って生きがいがいった旅行に行かれたこともあります。

ここまでご紹介させていただきました皆様の病気を持たれながらも、病気とともにどのように暮らして行きたいかというご希望に向けてのリハビリは、我々にも感動を与えて頂きました。感謝、感謝です。我々が大切にしている「その人らしさ」は、病気になって失ってしまうものでは決してなく、リハビリは、その人らしく生きる希望を与える道しるべとなり、大きな感動を、我々を含む携わる人間全てに与えてくれています。

もし本記事を読まれて、リハビリにご興味を持たれた方がいらっしゃいましたら、愛知県難病団体連合会様を通じて、または私が代表取締役を務めます高齢社会街づくり研究所(ホームページ：<https://machikenhp.wixsite.com/home>)までご質問ください。お答え出来ればと考えています。